

# 星とともに走る

日誌 1979-1997

## 四方田犬彦



七月堂



四方田犬彦（よもた・いぬひこ）

1953年西宮生れ。東京大学文学部で宗教学を、同大学院で比較文学を学ぶ。修士論文『空想旅行の修辞学』はのちに七月堂から刊行された。1979年に韓国に渡り、ソウルの建国大学で日本語と日本文学を講じる。帰国後、映画批評を中心に執筆活動をはじめ。84年に東洋大学で英語教員となり、87年からはコロンビア大学比較文学科の客員研究員を勤める。90年に明治学院大学文学部芸術学科で映画史を教えはじめ、現在は教授。韓国映画連続上映、泉鏡花映画祭、溝口健二生誕百年記念国際シンポジウムなど、映画をめぐるさまざまな企画に携わりながら、文学、映画、漫画、アジア論といった幅広い領域にわたって批評活動を行う。主な著書に『映像の招喚』（青土社）、『中上健次・貴種と転生』（新潮社）、『漫画原論』（筑摩書房）、『電影風雲』（白水社）、『心ときめかす』（晶文社）などがあり、『月島物語』（集英社）で斎藤緑雨文学賞を、『映画史への招待』（岩波書店）でサントリール学芸賞を受けた。翻訳にポール・ボウルズ『優雅な獲物』（新潮社）『蜘蛛の糸』（白水社）、パゾリーニ詩集（近刊）などがある。『中上健次全集』（集英社）、『世界文学のフロンティア』（岩波書店）の編集委員を勤めた。

## 星とともに走る

日誌1979-1997

---

1999年 2月20日 第1刷発行

1999年 4月20日 第2刷発行

定価 本体2600円＋税

著者 四方田犬彦

発行者 木村栄治

発行所 七月堂

〒156-0043 東京都世田谷区松原1-38-5

TEL/FAX 03-3325-5717

---

印刷所・トーヨー社 製本所・並木製本

© Yomota Inuhiko 1999 Printed in Japan

ISBN4-87944-019-1

---

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

星とともに走る

四方田犬彦



# 目次



一九七九年	ソウル	9
一九八七年	ニューヨーク	35
一九八八年	ニューヨーク、月島	63
一九八九年	月島	93
一九九〇年	月島	123
一九九一年	月島	153
一九九二年	月島	185
一九九三年	月島、フィレンツェ	215
一九九四年	月島、ポロニーヤ	251
一九九五年	ポロニーヤ、高輪	285
一九九六年	高輪	321
一九九七年	高輪	355
後書き		373



星とともに走っている者として星の運行を  
ながめよ。また元素が互いに変化し合うのを  
絶えず思い浮かべよ。

マルクス・アウレーリウス『自省録』VII・四七  
(神谷美恵子訳)

星とともに走る



一九七九年  
ソウル

三月二八日 東京

ようやく労働ヴィザが支給される。今日のために大韓民国領事館第七番窓口まで、どれほど日参したことが。担当の係員は机の目のまえにはくのパスポートがあるのに、故意にそれを無視して、余計に何日も待たせた。隣の観光ヴィザの窓口にはポスターが貼られ、愛想のいい対応がなされているというのに。勤め先の大学の授業はすでに三月一日から始まっている。ほくを招いてくれる建国大学校師範大学のほうからは、いつになつたら来れるのかと催促の電話がいくたびも来た。一月から渡航を申請しているというのに、この遅れは只ごとではない。それがさらに一か月待つて、やっと半年の滞在許可が下りたというのも、不可解としかいいようがない。結局、六か月以内に韓国内務省に出向いて、もう一度滞在中の申請をしなければならぬ。パスポートとヴィザが強制してくるアイデンティティの決定。「同律律の不快」とは、このことではないか。

建国大学の李福淑教授に国際電話をし、なんとか数日でソウルに到着できそうと連絡。最初の一か月の授業は、あと

で補講をすればなんとかなるといわれる。「カイエ」の映画特集に出ている松浦寿輝と鈴木啓一のエッセイを読む。

三月二九日

出発のための荷造り。いまだに初歩の韓国語のレッスンをさえ充分でないことが不安だ。ハングルだけはなんとか発音できるところになったが、まだゆっくりとしか読めない。由良哲次逝去の報を新聞で知る。横光利一の『旅愁』のモデルになった人だったが、戦後は写楽と耶馬台国の研究ばかりしていたと聞いた。子息の君美氏は葬式の支度で大変だろう。

四月一日 ソウル

眠りが固まらぬままに目覚め、羽田から伊丹經由でソウルの金浦空港へ向かう。同じ飛行機に高見山が乗っていた。富士山を上空から見下ろすと、ただ黒い火口がぼつこりと開いているだけで、いかなる感傷の入る余地もない。レオナルドが描いてみせた女性の陰門のようにさえ思える。日本人が千年にわたって独自の美だと無邪気に信じてきたものが、ひとつたび角度を変えてみると単なる穴でし

かないことに気付くことは面白い。もつとも誰も富士山を真上から覗いて見ることなど、考えてもいなかったわけだが。機内のイヤホンサービスから流れてくるのは、高橋悠治の弾くバッハのバルテータとシューマンのクライスレリアーナ作品十六だ。『彼自身によるロラン・バルト』を読み続ける。日本海を渡るとき、どこかで遠くの方に岩の固まりのような小さな島を見かけた。あれが紛争の絶えない竹島だろうか。

金浦空港の税関は、予想していたほどに厳しくなく通過した。もっている日本語の本や雑誌を、目のまえでビリビリと破かれるということもなかった。日本人が潜在的な恐怖から作り出したデマだったのだろうか。両替をする。一円が二・二ウォンくらいのレートだった。李福淑さんと崔博光さんが出迎えに来てくれた。空気は東京よりも乾いている。空港周辺ではカメラを靴から出すことは禁止だといわれた。いたるところがハンゲルド。二人に案内されて、あらかじめ見つけてもらった下宿へと向かう。江南区蚕室四洞にある薔薇アパートというマンションの四階である。ここに住む辛さん

一家の一部屋を借りることになった。

辛埃<sup>シノイ</sup>珉<sup>ミン</sup>氏は現在六十歳で、以前は釜山のデパートで支配人をしていた。日本語が通じるので、内心ホッとする。夫人との間に三人の息子がいる。長男は家具商で、すでに釜山で家庭をもっている。次男は医学生。三男は目下兵役で不在。この三男の部屋を人手に貸そうとしていたところに、ぼくが入ったわけだ。はじめに接するオンドルの部屋は、つるつるして冷ややかである。荷解きをするど、どつと一日の疲れが出た。窓からは漢江が見えた。河原と水は暗くて見えなかったが、橋の両端にある検問所の光は確認できた。

#### 四月二日

朝、散歩に出ようとすると、困つたら「サベイロ・カムニダ」といえと、辛夫<sup>シノウ</sup>人から教えられる。四〇一号室へ行きますから、という意味になるのだそうだ。蚕室洞は高島平に似た巨大なアパート群で、まだ建設されて新しいようだ。東側はがらんと空地が続いていて、さらに向こうには藁葺きの屋根の並ぶ農村が微妙に見える。ぼくの棟のすぐ北は漢江とい

う、橋を歩けば十分ほどかかる大河が流れていて、それを渡りきるとソウルの市街が始まっている。勤務することになった大学は、この橋を渡り、バスで十分ほどのところだという。

崔博光が同僚で農学博士の梁昌述<sup>ヤンチャスル</sup>氏を連れて来る。これからいっしょに詩壇の長老である金素雲<sup>キムソウン</sup>先生を訪問しようというわけだ。彼はたまたまぼくの隣の棟に住んでいるとわかる。

金素雲は開口一番「この国で本当に何か物事をなそうと思つたら、疵なしではやっつけていけませんよ。ここで可愛がられて死んでいく人間は、地獄で閻魔様に叱られるだけですわね。わたしももう昔のことは忘れしました。老いの繰り言ですかな」という。戦争前の日本のインテリはきつとこんなふうには喋つたのだろう、という感じの日本語だった。胡麻と蜂蜜を混ぜたお茶が出る。藤枝静男という人の顔はドイツでも軍人になれるくらい立派な怖い顔ですが、あの方の思想は実に穏やかで、親切で、わたしはこないだ浜松まで会いに行きましたともいう。

初めて建国大学に行く。大学校前<sup>テウキョウマエ</sup>までバスで四つ目。小さな五円玉に似たトッ

クンを五十ウォンで買わなければいけない。一九四六年に建てられた新しい大学らしく、どこまでも広々とキャンパスが続いている。ぼくが通うことになる師範大学（教育学部）は、小高い丘のうえにあった。研究室はガラシとしていて、本など何も無い。助手のミス李に紹介される。太った、温厚そうな女性だ。総長室では朝鮮人参のお茶が出た。どの部屋に通されても、壁には瘦せて陰気そうな男の写真が、太極旗とともに飾られている。もう十八年まえに軍事クーデターに成功して以来、ずっと権力の座に就いている朴正熙<sup>パクジョンヒ</sup>大統領の顔だ。彼は目下「精神維新」を決行中であると説明される。

#### 四月三日

最初の授業。四年生なので、日本語の読みはすでに相当にできる。石川セリの「八月の濡れた砂」のテープをかけて、聞き取りをさせる。学生は四十人ほど。男女は同じくらいだが、三年近い兵役があるために男子の卒業は二十五歳くらいになるのが普通らしい。授業が終わって二人の学生と近くの食堂にピビンバを食べにいく。こちらが

ほうっとしている間に、勘定は彼らに払われてしまった。鄭君は大阪に親戚がいるらしく、大阪と東京では言葉がどのくらい違っているのかと、尋ねてくる。兵役をすました学生と、まだすませていない学生とでは、気分がうえても、勉強態度でも、大きな違いがあるということが、今日だけでもわかった。

#### 四月五日

今日は国家を挙げての植林日であり、学生たちとバスに乗って、高速道路を天安まで行って記念植林をする。ソウルの外へ出るのははじめてだ。松の苗木を十本ほど植えた。在日僑胞母国慰問団の青年たちといっしょになる。長崎と佐賀の人たちらしい。顔を見ただけで彼らが日本から来たとわかるのは、フアッション感覚、とりわけ女性の化粧のしかたが、ソウルとまったく違って、垢抜けているからだろう。ほか日本人だと日本語で話しかけても、どうにも理解できないでいるらしい。あなたの日本語は机のうえで習っただけの言葉だから、一度日本に来て勉強してほしいと、九州弁丸だしで励まされる(?)。

記念植林が終わって、ソウルに戻る。崔さん、梁さんと、大学近くの日本料理店に行く。テンプラもサシミも、その他の料理も、とうてい日本料理とは信じられないほどに異なっている。ホステスたちがめいめいの傍らにびったり寄り添って、しきりに話しかけてくるのだが、言葉が通じずもどかしい思いをする。今日の特別出張費として学長から受けとった五千ウォンをチップに渡すと、巧みな日本語で「ブルーライト・ヨコハマ」を歌いだした。うちにはビールがあるからいらっしやいと梁先生に誘われて、付いてゆく。夜十二時を過ぎると一般市民は外出が禁止されている。結局、遅くまで呑んでいて、仮眠のあとでアパートに戻った。京都大学で博士号を得た梁さんは、今の軍事独裁体制がとことん嫌いらしい。にもかかわらず、関係者筋に賄賂を配って徴兵逃れをするブルジョワ青年たちは許しておけないと、力説する。

#### 四月六日

学生の金恵敬と高敬兎に案内されて、五八八番のバスに乗り、ソウルの中心部まで進んだ。この邑は恐ろしく交通事情

が悪い。いたるところで真黒な排気ガスを出しながら、満員バスがのろのろと動いている。大学から競技場を抜けて南大門市場に到着するのに四十分もかかってしまった。これは東京でいえば、渋谷から新宿くらいの距離である。市場のなかは道という道が曲がりくねっていて、恐ろしいばかりの賑わいだ。ありとあらゆる物資が溢れかえり、甲高い物売りの声が雑踏のなかを響き渡っている。ようやく市場を抜けて、デパートのある表通りに出たときには、ひと仕事したような気持ちになった。食堂に入ってビールを注文しようとしたら、九百ウォンだといわれる。これは他の物価とくらべると、ひどく高いという印象。これで昨日の梁さんの言葉の意味が解けた。この国ではビールは貴重品なのだ。三人で麺を食べていると、いきなり「シューシャン！」という声がかして、ひどく度の強い眼鏡をした子供が靴磨きの注文にきた。断ると、次はチューインガム売りの子供がやって来た。いずれも十歳くらいだった。ミス高にはボーイフレンドがいて、目下アラビアで働いているという。夜九時になり、アパートに戻るバスを見つけるのに三十

分待たされた。バスのなかで、こちらが日本人だと気が付いたのだろう、日大で勉強したという老紳士に話しかけられる。「眠るまえに、また街の……」(アラ・ロブリーグリエ)。

#### 四月八日

辛さんが今朝の新聞に出ている記事を、にこにこしながら説明してくれる。日本の若者の間に平和に対する倦怠が強くなり、自衛隊への志願が相次いでいるとのこと。まさか、本当だろうかと思うが、ともかくそう報道されているらしい。毎週、大学では軍事教練がある。教室にはかならずROTCといって、士官候補の特別学生が藍色の制服姿で顔を見せる。カーキ色と黄色の混ざった迷彩服や、それこそ本物の軍服のまま通学してくる学生も少なくない。四年生の許錫は、軍隊時代にガリ版刷りの『限りなく透明に近いブルー』の翻訳を古参兵からエロ本だからと手渡され、上官に見つかるとまづいので便所に隠れて読み通したという。ともかくここは日本とはまったく違う社会であると、痛感させられる。「そこ

に住む人々のひとりを愛すると、都会はひとつの世界となる。」ダレルのいうことは、はたして本当のことだろうか？

#### 四月一日

許錫とともに、安国洞の出入国管理事務所に赴く。用意していた写真が一枚不足していたため書類だけをもらって帰る。東京の領事館とは打って変わって親切な係官であった。許君は光州出身で、軍隊時代はプラスチックバンドでシンバルを担当していた。七年間交際していたガールフレンドとは宮合(姓名判断のごときものか)が合わずに親の反対に逢い、結婚できなかったという。妊娠でもさせてしまえば勝ちだったのではないかという。そんなことは韓国では考えられないという。彼に連れられて、ソウル劇場で李斗庸という監督の『お兄ちゃんがい』というフィルムを観る。はじめて観る韓国映画だ。東京大生と京城大生の空手合戦から、処女の転落、親友の裏切り、日本軍人の横暴、死んでいた兄の釜山港からの帰還と最後の親友との対決まで、とにかく息を呑むまでに面白い。新派とアクションのみごとな結合である。こん

な素晴らしいフィルムが隣の国で大人気であったと知らない日本人は、なんと残念なことだろう。

#### 四月一四日

三年生の李碩浩が読み方のわからないところがあるといつて、川上宗薫の新書判の小説をもつてくる。どうやら父親の書斎から持ち出してきたらしい。高級住宅地にある彼の家に遊びに行く。弁護士だという父親が出てきて、光復前の日本の教科書の蒐集をしているという。しばらく呑んでいると、いっしょに軍歌を歌おうといってくる。教育勅語を滔々と暗唱しだしたときには、ひどく複雑な気持ちになった。食事をしている間に二度、停電となった。

#### 四月一七日

学生たちの昼食の取り方。簡易食堂でインスタントラーメンを注文し、あらかじめ持参した弁当の一角の御飯とキムチを食べたあとの隙間にラーメンのスープを注ぎこむ。蓋をよく振り、ピビンバだと自称しながら食べる。彼らは卓を囲むと、一杯のポウルの米をみんなで回



しながら食べたります。けっして割り勘を認めず、いつも誰かが全員の分の勘定を払ってしまう。釜山で半年まえに誘拐された十歳の少女が、またしても別の犯人によって誘拐されたという奇怪なニュースを知る。

#### 四月一八日

四年生の徐銀順<sup>ソンスン</sup>が、クラスを代表するかのようにして質問に来る。日本語学科の学生たちは、英語やフランス語を専攻する他の学科の学生に対して、複雑な負い目と劣等感を抱いているが、どうすればいいのかと尋ねる。なんでも学生のひとりの祖父に、そのかみの朝鮮独立党の一員として満州で活躍した人物がいて、孫が最高学府でわざわざ民族の宿敵の言語を学ぶと聞いて、烈火のごとくに怒ったという。学生はその後軍隊に行き、除隊後の祖父には内緒で日本文学の勉強をしているらしいが、どう思うかと尋ねられる。

いったいなぜ日本語などを勉強しているのかというのは、日本語学科の学生たちがつねに晒されている質問である。韓国人の学生があえて日本語を選択すると

きには、フランス語やロシア語の場合のように、その言語が話されている文化や国家への強い憧れが前提となっているのとは違って、よりいつそう扱われた経緯を潜らなければならぬ。三十五年間にわたって日本帝国主義（「日帝」と簡略化している）に支配蹂躪されたことの屈辱と憎悪がまず横たわっている。だが、この憎悪はどこまで真性なものなのか。日本を憎むほかに、今の韓国人は日本について知っているだろうかという疑問が生じる。同じことは日本人にもいえる。われわれはあまりにも韓国のことを知らない。

#### 四月一九日

今日は韓国史を揺るがす「義拳」が生じた記念日で、大学は休みだ。ぶらぶらと街を歩く。忠武路<sup>チュウブロード</sup>三街のあたりは日本料理店でいっぱいだ。街角で靴の修理の仕方を観察する。細い糸をたくみに操り、膝ったあとで最後にマッチの火をつけて、糸を焼き切る。おそるべき速度ですべての過程を終えてしまう。

#### 四月二〇日

天気がいいのでアパートから漢江に出て、土手を散歩する。しばらく行くと川岸にも畑があり、農作業をしている人がチラホラと見える。機械を用いて煎餅を焼いている老人がいる。邪魔になるので避けて通ろうとすると、「チヨンマネヨ！」と大声でいわれた。柳の下では子供たちが遊んでいる。休息をしている老人に話しかけた。一九四七年に北から逃げて来たのだという。戦時中は日本の「皇軍」に属していたといったが、それ以上は詳しく話そうとはしなかった。ただ「金日成は人間じゃない。あれは豚だよ」と、吐き捨てるようにいった。

#### 四月二一日

李朝時代にヴェルサイユ宮殿を模したという徳寿宮<sup>トクジュグン</sup>を見学。そのあとミドバ・デパートで李仲燮<sup>イジョンソク</sup>の作品展を観る。日帝時代には東京の三宿に住んでキュビズムを学んだ画家で、朝鮮戦争のさなかには画用紙がなくなり、米軍がくれるラッキーストライクの銀紙を引き伸ばして、その裏に釘で人間や牛をスケッチしたものが、丁寧に展示されていた。日本人だった夫人とは、結局離別し、晩年は発狂し